一騎討ちか―三つ巴戦か

水元氏四選不出馬を約束　四年前に六者会談で

（第一面から）

四十五年の場合も水元氏に対する信任投票といった形で岡崎氏との一騎討ちとなりましたが、現職の強味で水元氏が二選を勝ちとり、岡崎氏はこんごは後進の人材育成につとめると声明して第一線から退き、自民党支部長も井出利一郎氏にバトン・タッチしました。

四十九年の水元氏の三選に対しては、「町を育てる会」が井出利一郎氏を立てることにしていましたが、直前になって井出氏がおりたために、水元氏の無競争三選が実現しました。

なぜ井出氏がおりたかは、その当時は一般には井出氏という一身上の理由によってと思われていましたが、実はその裏には町の平和を願んでの賀陽覚了氏のあっせんで水元氏側と「町を育てる会」との話し合いがあったものです。

あつまったのは賀陽氏、水元氏本人、作間勝雄氏に「育てる会」から島田弥義氏、野崎武氏、安久津倩人氏で、この席上で水元氏は『市町村長や知事や総理大臣などというものは三期が限度であるべきで、私の場合は特に年令的にも健康上からも三期かぎりで四選に出馬する意志はない』と言明しました。

このことばそのとおりに信じた「育てる会」の側としては、水元氏の淡々たる心境に、敢えて争うことはないとして井出氏を説得して今期は断念させて、町史はじめ町長無競争当選を実現させたものです。

順序をへた矢野氏の立起ぶり

中川一郎本別後援会の青年行動隊ともいうべき二一会は初代会長の矢野常雄氏を中心に農村、商工青年など約七十名が結束して、中川代議士の選挙にも水元町長の選挙にも大いに活躍してきたもので、同会の定例会合日での二十一日には水元町長も顔をみせて『もうそろそろ私の後継者を考えてほしい、矢野君などはよいのではないか』と二度の会合でもいわれたこともあり、二一会としては昨年夏いらい次期町長選に矢野氏の擁立をすすめていましたもの順序として水元後援会の石山利博会長と選挙責任者だった長谷川義信氏を訪れて矢野氏擁立、立起の旨を申し入れたものでした。

特に長谷川氏に対しては水元氏の後継者として出馬するのかどうか確かめたところ、その意志のないことが明らかにされたので、それではと矢野氏擁立の推進グループは積極的に動き出すことになり、矢野氏が本別町農業共済組合の参事であるので暮の七日の同組合理事会後の臨議会で諒承を得たものでした。

矢野氏の陣営としては、水元氏がいわゆる「六者会談」ばかりでなく常に町長というものは三期が限度と公言してきたし、後継者には矢野氏がよいのではないかとまでいっていたので、その「受け皿」として全町的に活動を展開したところ水元氏の方では意外にもう一期の意向を示して従来の支持層に再度の協力を求めて動き出したのでビックりしたものです。

同じ中川後援会を支持母体とする水元氏と矢野氏とがともに争うことは好ましくないとして、暮の十四日に双方が話し合うことになり、水元氏側から石山後援会長、帯田中川後援会長、佐藤統一自民党支部幹事長、長谷川義信、朝日明、鳥居健太郎氏ら七名、矢野氏側から荒木又蔵氏ら青年グループ七名が出席して、これまで各種選挙でともに一致して行動してきた同志が一転して対決し合うことはさけようという点では共通したものの、そのためにだれがおりるのかとなるとお互いに譲る気配はなくものわかれとなりました。

その後この調整工作は数回にわたってつづけられましたが成功せず、これまで水元氏の側元だった高木章氏（副議長で農業共済組合長）が青年層の要望によって直接に水元氏と話し合ったところ、水元氏は『なんとか矢野氏が断念するように説得してほしい』とのことで、高木氏は『正月の五、六日に矢野後援会設立準備会の役員会がひらかれるので報告する』と答えたものの、これを伝えきいた準備会の面々は、さっそく明けて三日に拡大役員会をひらいて百名あまりで気勢をあげたものでした。

それは、これまで水元氏のためにつくしてきた矢野氏を立起するようにすすめておきながら、イザとなれば引っ込めとはなにごとか、四選には出馬しないといいながら七十才に近い高令で、しかも病弱の身で町長の座に恋々とするのか、人がいないのなら別だが、若い矢野氏の登場に応援してくれるのが常識ではないかとして、水元氏がどうであれ立起の体制を固めて近く後援会設立総会をひらくことになりました。

井出氏もだまされた？

立起を決めている井出利一郎氏にしても水元氏の舌先三寸にだまされたようなもので、四年前の六者会談でホロリとさせられて、水元氏の三選出走を飾るために貢献?しただけにおわったわけで、その会談をとりもった賀陽氏は目下海外旅行中ですが、責任感から国際電話でその当時の出席者にもようをきいてアンガイしており矢野陣営にしても井出陣営にしても賀陽氏の帰国を待っている状態です。

あのときの六者会談にもかかわらず井出氏が出馬したとしても勝てたかどうかはわからないとして、町の平和のために乗り出した賀陽氏の誠意は裏切られたわけで、一言あって然るべきというところです。

町のソウソウたる人々が顔をそろえて約束したことが平気で破られたのは道義に反することで、町の最高責任者の言動であるだけに町の元老である賀陽氏の出方が注目されています。

水元氏としては、矢野氏や井出氏との三つ巴戦となればどうしても社会党や地区労の協調をとりつけなければならないので、このほど他の用件で来庁した新井実地区労議長らに対して協力を求めましたが、新井議長らはここで即答はできませんでした。

というのは、これまで推薦をつづけてきた地区労が昨年の定期大会ではじめて推薦を見送っているためで、その理由としては各組合とも“オテアゲ”ですが

一、本人は町長は三選を限度といっており、今期で勇退が“花道”である

二、高年令での多選は好ましくない

三、本人はひところより元気そうだが、民間の良心としては勇退に専念することを希望している

四、門脇助役“アテ馬”ぶりや住民との折衝問題など民主的な姿勢を失ってきている

五、こんごは地区労の壮図にはならないと放言している

六、特定の建設業者とのゆ着が云々されている

などによるものといわれています。

このたびの四選立起にはお膝元の役場職員組合―地区労―社会党―農民同盟の線から推されたのでという大義名分?がないので、建設業者の一部からの要請?とのウワサも飛んでいるほどで、三巴戦となって勝てる見込みがなければ、あるいは断念の事態もあり得るとみる向きもあります。

そうなれば当然に矢野氏と井出氏との一騎討ちとなりますが、一部には門脇助役を推そうという動きもあり、地区労の町長選へのとりくみ方が大きく影響するのでこれからの動きは全く流動的といえましょう。

一九七八年の新春

陸別町議会

議長　竹内千代蔵
副議長　松台国雄

総務常任委員会
委員長　宮古　秀
副委員長　高橋　誠
西野一郎
西岡光男
池尻英治
矢鍋正信

産業建設常任委員会
委員長　国野竹男
副委員長　高橋一吉
佐々木茂雄
新藤万亀男
岡部嘉延
北村国義

厚生常任委員会
委員長　渡辺平吉
副委員長　西村秀雄
松台国雄
林　保治
藤沢　勉

議会運営委員会
委員長　矢鍋正信
副委員長　新藤万亀男
林　保治
北村国義
藤沢　勉
池尻英治

議会事務局
局長　坂井　一
野下純一

足寄町議会

議長　大滝弥　助
副議長　大久保　繁

総務常任委員会
委員長　遠山　謙
副委員長　矢野寛一
大久保　繁
吉田吉之助
鳴海一郎
鷲足　賢

産業経済常任委員会
委員長　神本三也
副委員長　高橋信夫
佐々木政一
斉藤禎一
大坂正夫
島　正吉
多治見敬一

建設常任委員会
委員長　高橋　募
副委員長　石田富男
久保田庄太郎
横田文治
五十嵐信雄
花田静男

文教厚生常任委員長
委員長　香川博彦
副委員長　高橋幸雄
大須武夫
阿部俊夫
叙谷鐘平
松崎　稔

議会運営委員会
委員長　吉田吉之助
副委員長　鷲足　賢
矢野寛一
石田富男
叙谷鐘平
松崎　稔

議会事務局
局長　猪狩恭政
石井俊定
鈴木美枝子

本別町議会

議長　方川新一
副議長　高木　章

総務常任委員会
委員長　天野晴清
副委員長　山田義輝
作間勝雄
朝日　明
山口勝雄
松下一桜
高木　章

建設常任委員会
委員長　狭島芳雄
副委員長　川口正夫
井出利一郎
佐野　薫

文教厚生常任委員会
委員長　鳥居健太郎
副委員長　森　正勝
賀陽覚了
小川健次郎
北村和郎

産業経済常任委員会
委員長　矢吹正義
副委員長　貞本利光
野崎　武
井上俊也
佐久間正光

議会運営特別委員会
委員長　作間勝雄
副委員長　朝日　明
高木　章
小川健次郎
川口正夫
狭島芳雄
北村和郎

議会事務局
局長　横田鉄三
石川輝子
吉田百合子

池北三町消防事務組合

管理者　小林弘道
議長　大滝弥助
消防長　堀　省三
足寄消防団長　久保与一郎
本別消防団長　鳥居健太郎
陸別消防団長　山本嘉一

池北三町浄化センター組合

組合長　小林弘道
議長　竹内千代蔵